〈研究ノート〉

北九州の「被爆体験」
――『小倉に原爆が落ちた日』と荒木正夫の視点から――

“A-bombed City” Kokura: A Brief History of The Picture Book and its Publisher Masao ARAKI in Kitakyushu City, Japan.

鈴木　裕貴*

1. はじめに

例年 7 月になると、厚生労働省は全国の被爆者健康手帳所持者に関する統計数値を公表する。手帳所持者の平均年齢や総人数など、前年度末現在の集計値が HP 上で公開されるものである。

「被爆者の平均年齢、初の 85 歳超え」「厚労省まとめ 手帳所持 11 万 3649 人」[1] など新聞各紙でも報じられるこのデータにおいて、意外にも見落とされがちなのが、47 都道府県ごとの被爆者数に関する項目である。一例として、2023 年 3 月現在の同数値を挙げると、表 1 のようになる。広島・長崎両県が全国最多の被爆者人口を抱えていることは明らかであるが、それ以外の地域にも少なくない被爆者が居住していることが分かる。

全被爆者人口のうち約 1/3 にあたるこれら二県以外在住の被爆者は、量的には少数派であるものの、決して軽視されるべき存在ではない。むしろ、これら被爆者の戦後やそこで見られた各種継承活動の歴史は、被爆地内外の活動の多様性を考えるうえで、さらに言えば、広島・長崎における既存の「通史」「正史」が何を見落としてきたかを再考していく上でも、極めて重要な

＊立命館大学 衣笠総合研究機構 生存学研究所 研究員

表１　全国の被爆者健康手帳所持者数（2023 年 3 月現在）

北海道	青森県	岩手県	宮城県	秋田県	山形県	福島県	茨城県	栃木県	群馬県	埼玉県	千葉県
200	36	14	84	13	9	45	269	133	79	1322	1710
東京都	**神奈川県**	**新潟県**	**富山県**	**石川県**	**福井県**	**山梨県**	**長野県**	**岐阜県**	**静岡県**	**愛知県**	**三重県**
3838	2939	59	33	51	40	52	86	233	376	1438	229
滋賀県	**京都府**	**大阪府**	**兵庫県**	**奈良県**	**和歌山県**	**鳥取県**	**島根県**	**岡山県**	**広島県**	**山口県**	**徳島県**
226	698	3698	2370	419	144	151	539	938	53460	1678	70
香川県	**愛媛県**	**高知県**	**福岡県**	**佐賀県**	**長崎県**	**熊本県**	**大分県**	**宮崎県**	**鹿児島県**	**沖縄県**	**合計**
194	432	77	4576	604	28339	656	388	253	380	71	113649

出典：厚労省 HP「被爆者数・平均年齢」（https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_26531.html）をもとに筆者作成

事例となりうるものである。

本稿が焦点を当てる福岡県北九州市（旧小倉市）はまさに、被爆地以外の地にありながら、体験の継承に向けた多くの取り組みが見られた地域の一つである。東京や大阪など大都市圏を凌ぎ、広島・長崎以外では全国最多の被爆者人口を抱える福岡県下、北九州市は同市だけでも約 700 人の被爆者を擁する地域としてあり、毎年 8 月には市独自の原爆犠牲者慰霊平和祈念式典が執り行われるなど、被爆地二県に引けを取らない継承活動への積極的な姿勢が見て取れる[2)]。

もとより北九州におけるこうした原爆問題への関心の高さは、同市の被爆者人口の多さにのみ由来するものではない。より重要なのは、同市が原爆投下の有力な候補地であったという歴史的背景である。1945 年 4 月、日本の主要都市から原爆投下候補地の選定作業を開始した米目標検討委員会（Target Committee）は、複数回にわたる討議を経て、広島・小倉・長崎・新潟を有力な候補地に選定した。8 月 6 日、広島で人類史上初となる原子爆弾「リトルボーイ」が投下されるとともに、8 月 8 日には 2 発目となる原子爆弾「ファットマン」の投下指令が、第 1 目標小倉、予備目標長崎を照準に発せられた。翌 9 日未明テニアン島を飛び立った B29 爆撃機は午前 10 時頃小倉上空へ到着、弾倉を開き約 1 時間上空を旋回するも、視界不良により同地への投下を断念し、予備目標の長崎に針路を変更する。午前 11 時過ぎ、長崎市上空で投下された原子爆弾が、同年内だけでも約 7 万人の犠牲者を生ん

だことは、私たちの知るところである。

8月9日当日小倉が原爆投下を免れた要因には、前日（8月8日）の八幡空襲の残煙による視界不良や、米軍が投下地の目視確認を義務付けていたこと、その他爆撃機の補助燃料装置の故障など様々な遠因が指摘されているが、いずれにせよ、小倉がある種の歴史的「偶然」により原爆被害を免れたということは否定できない事実としてあった。同時に、それが長崎への「後ろめたさ」や「申し訳なさ」という、同市の共通感覚にもつながってきたことは見逃すべきでない点である。先に見た平和式典の開催に加え、「昭和20年8月9日は〈小倉原爆〉だった」（北九州市立文学館：2011年企画展）・「長崎の人に迷惑をかけた」（RKB放送：2020年「消えない黒煙：原爆はなぜ長崎へ」）など、今日に至るまでこうした長崎への贖罪意識が語り継がれていることを考えると、それはいわば、同地で疑似的な「被爆体験」が形成されてきたとも考えることができるものである。

では、北九州におけるこうした長崎への贖罪意識、またそれを土台に生み出されたある種の「被爆体験」は、同市内で戦後どのような時期に、またどのような背景のもと形成されたものなのか。本稿はこの過程において重要な役割を果たした一冊の絵本、『小倉に原爆が落ちた日』（1983年、あらき書店［以下、『小倉原爆』］）を取り上げる。後述するように、同書は刊行後図書館への配備が進められ平和教育の現場でも積極的な使用が進められる著作となった。『小倉原爆』の出版経緯や同時代の社会背景を明らかにすることで、戦後から今日に至る北九州の「被爆体験」形成の発端を、歴史的に跡付けていくことが本稿の目的である。

なお原爆被害を扱った絵本や児童文学の歴史については、これまでにも一定の関心が向けられてきた[3)]。広義の言説史や文化史としての成果も含めれば、その蓄積は膨大な数に上る。だがそれらが基本的に対象としてきたのは、あくまで広島・長崎の直接的な「被爆体験」を扱った作品群であり、他の地域、とりわけ原爆投下の候補地とされた地域の疑似的な「被爆体験」に関す

る作品は、全くと言ってよいほど射程外にあった。他方、当の北九州地域の戦争を主題に据えた歴史研究は、小倉陸軍造兵廠など同地の軍事施設と地域社会との関係性に注目したものが大半で[4]、わずかに同地の小倉と原爆の関係を扱った歴史研究も、基本的には先に見たような視界不良の要因を軍事史等の視点から再構成・再考察していくものがほとんどである[5]。

本稿はむしろ、戦中ではなく戦後の同市で、疑似的な「被爆体験」が形成された過程を、『小倉原爆』を手がかりとしつつ解明していく。そもそも同書はどのようなきっかけで出版に向かったのか（第2章）、またその過程では市内在住の被爆者はどのような関わりを見せていたのか（第3章）、同書刊行後今日に至るまでの北九州市内での「被爆体験」をめぐる動向への影響も含め（第4章）、検証を進めていく。それは、これまで見過ごされてきた広島・長崎以外の地における「被爆体験」の形成史を再評価していく作業であると同時に、それら地域の視点から、体験の「継承」をめぐる既存の議論を批判的に再検証していく試みである[6]。

2. 『小倉原爆』の出版まで

1982年8月5日、朝日新聞西部本社は朝刊1面に「原爆投下、小倉だったら……」と題する特集記事を掲載した。長崎への原爆投下が予定通り第1目標の小倉に投下されていた場合、どのような人的かつ物的被害につながったのか、当時の気象条件や人口構成などをもとにシミュレーションを試みた初の取り組みであった[7]。キャップは社会部次長宮崎勝治、同社会部記者の宮崎勝弘が実質的な取材構成を担った。例年夏の大型特集は、同じ九州圏内の長崎原爆が紙面の大半を埋めることが通例となっていた当時、あくまで地元北九州の視点から原爆や戦争問題を扱うことができないか、部内で模索が進められたことが背景にあった。

夏の原爆企画を社会部内で話し合っている際、小倉にあのまま原爆が落ちていたらどうなっていたろうか、という疑問が持ち上がりました。長崎を舞台にしないでナガサキを描ければ、被爆体験の広がりに役立つのではないか。軍需都市・小倉が原爆の投下目標になったことをあらためて記述することは、戦争態勢に組み込まれた都市の危険性を端的に指摘できる。それに、原爆企画として何か新機軸を打ち出したい、という気持ちも強くありました[8)]。

西部本社のこうした意志を汲み実際のシミュレーション作業を担ったのが、九州大学の森茂康である。同大理学部を卒業後、専門の核物理学を中心に教養部で教鞭をとっていた森は、長崎三菱造船所に動員された自身の体験もふまえ、県内の平和運動に積極的な参加姿勢を見せていた存在でもあった。依頼を快諾した森は、早速宮崎とともに 1945 年 8 月当時の地形図や下関気象台の観測資料などを精査、そこに長崎の被害データを重ね合わせることで、小倉陸軍造兵廠を中心とした半径 5km に及ぶ被害想定を算出した。推計値とはいえ、死者 5 万 7000、全壊世帯 2 万 2000 というシミュレーション結果は、不確定要素ゆえに算出対象外とした「延焼」や「黒い雨」などの二次被害を含めれば長崎の被害規模を上回る可能性さえ指摘されるものであった。

「爆心 4 キロ内ほぼ全滅」「運命わけた「偶然」の重さ」といった見出しで計 3 面にわたり報じられた同記事は、当時の北九州市民にも大きな衝撃を持って迎えられた。報道から早くも 1 週間後、西部本社「声」欄には、「頭上の原爆を夢にも知らず」と題する投書が寄稿されている。「五日付の本紙に出ていた「原爆投下、小倉だったら」という記事を読み、りつ然とした。[…] まさに私は、死と隣り合わせにいたのである」[9)] と記したのは、当時小倉で終戦を迎えたという 50 代の男性であった。

市内で児童向け教科書販売を営んでいたあらき書店社長の荒木正夫も、こ

の特集記事に衝撃を受けた一人である。『壇ノ浦合戦の秘密』(1977 年)、『岩下俊作と祇園太鼓』(1982 年)など、教科書販売の傍ら多くの郷土誌出版を手掛けていた荒木は、『長崎の原爆絵本シリーズ』(1980-82 年)など平和学習用教材も自社編集のうえ出版を進めていた。

しかし、これらは題目通り長崎の原爆被害を扱った作品ではあっても、自身が住まう小倉を舞台にした作品というわけではなかった。あくまで地元の視点にたった「新機軸」の模索は、朝日新聞西部本社のみならず郷土出版社あらき書店においてもまた、当時模索の最中にあるものだったのである。

8 月 5 日の記事を目にした当時の衝撃について、荒木は以下のように記している。

> ある日、朝日新聞、八月五日朝刊に『原爆投下、小倉だったら』という宮崎勝弘記者の取材の記事を読んでわたしはビックリしました。[…]わたしは、早速宮崎勝弘さんの原稿を、ぜひ、本にしたいと思いました。わたしの手で出版したいと考えました。宮崎さんも、わたしの心を覗かれた上、それを了解して下さって、ただちに編集に取りかかりました[10)]。

荒木の呼びかけに応じる形で、宮崎は新聞掲載当時の内容を小中高生向けの平易な文章に加筆、荒木の知人で地元彫刻家の宮脇俊幸による挿画を加え計 29 頁で完成したのが、『小倉原爆』であった(図 1)。新聞記事掲載当時には詳録しえなかった 8 月 9 日当日の B29 目撃証言など、宮崎が取材過程で入手した多くの資料も盛り込まれ、同書は単なるシミュレーションや創作絵本といった枠を超える一大郷土史として世に問われることとなった。

西部本社での記事掲載から 1 年を経た 1983 年 8 月 9 日、定価 950 円で刊行開始された同書は、一部書店では品切れとなるなど、好調な売れ行きを見せた。小中学校による学校単位での予約注文が進められたこともあり、最終的に初版 3000 部は版元在庫切れに、刊行月のうちに増刷が決定された[11)]。

出版のきっかけをつくった西部本社自身、「教育・反核の場に反響」という見出しでこの様子を以下のように伝えている。

> 九日の長崎原爆忌を前に、幻の被爆都市・小倉が見直されている。きっかけは、このほど出版された『小倉に原爆が落ちた日』（北九州市小倉北区馬借、あらき書店）。北九州市内の小中学校は九日の「平和授業」に、当初の計画を変更して、この本を取り上げたり、読書グループや反核運動団体の間でも、同じような動きが出ている。［…］書店の店先でも「原爆を改めて身近に感じた」といって買い求める人も多く、一部では品切れになっており、あらき書店は発売早々、増刷を決めた[12]。

『出版ニュース』等の全国書評誌でも紹介された同書は、翌 1984 年度版の『日本選定図書目録』で「被害予測を通して語る原爆の恐ろしさ」と取り上げられ、公立図書館への全国的な配置が進められていった[13]。

もっとも、小倉が原爆投下を免れたという史実それ自体については、既に北九州地域の学校教育現場や家庭内等で一定認知されているものではあった。しかしその被害シミュレーションを実際に算出するという作業は全く前例のないものとしてあり、人々の中に部分的かつ断片的に形成されていた「幻の被爆都市・小倉」という潜在意識を、改めて集合的な形で提示する働きを、『小倉原爆』は担ったと言えよう。

図 1　『小倉に原爆が落ちた日』
出典：筆者撮影

この年、既に 1973 年より開催が始まっていた北九州市原爆犠牲者慰霊平和祈念式典への関心が高まったこ

とは注目に値する。「長崎と同時に黙とう」と題された記事では、「身代わりになった原爆犠牲者を追悼しよう」と、250 人以上の参列者が同式典に集ったことが報じられている[14]。

> 小倉ではなくて、長崎に。そして犠牲になられた被爆者の皆さま、ほんとに申し訳ありません。心から御冥福をお祈りいたします[15]。

荒木正夫が『小倉原爆』のあとがきに寄せた「申し訳ありません」という上記の一節は、この当時の北九州市民の意識を象徴的に示すものでもあった。シミュレーションを担った森自身強調したように、「「小倉はラッキーだった」というには長崎の惨禍はあまりにも大きい」[16] ものであるという意識は、戦後 40 年近く、北九州市民の中に潜在し続けていたのである。

「幻の被爆都市」としてのこうした北九州のアイデンティティはしかし、同地が実際に原爆被害を体験しなかったという意味での「非体験性」にのみ由来するものではなかった。『小倉原爆』やその反響の背景には、北九州市内に住まう被爆者たちの存在、すなわち彼ら彼女らの「体験性」もまた、重要な側面としてあったからである。同書出版を担った荒木正夫自身、実際には長崎出身の被爆者でもあった。彼は宮崎の特集記事を目にした際の衝撃について、先の引用文に続く箇所では以下のように語っている。

> 「原爆」と聞くと、忽ち、わたしの心が、大きく揺らぐのです。それは、すでに三十八年前の思い出になってしまいましたが、呪わしき、あの日、あの一瞬の出来ごとが、いまも、この胸を刺し通すからです。[…]「長崎原爆シリーズ」といい、「この本」といい、わたしが「原爆もの」に執念を燃やすのは、「被爆経験者」の一人として、戦争という罪悪を、心の髄から憎むからです[17]。

荒木のこの「被爆経験者」としての立場は、ここまで見たような『小倉原爆』の出版過程にどのようにつながっていくものとしてあったのか。そしてその荒木の「経験」とは、具体的にどのようなものとして彼の歴史に刻まれるものだったのか。続く第 3 章では、『小倉原爆』出版の中心人物である荒木正夫の戦争体験に注目し、彼の視点から、同書出版の経過、また北九州内外における「被爆体験」の歴史について検討を進めていきたい。

3. 荒木正夫と戦争――諫早、長崎、そして小倉へ

1930 年 7 月、長崎県に生まれた荒木正夫（図 2）は、実父が電気事業を展開していた朝鮮半島京城へ渡るも、勤務先の事故で父が急死し、実母とともに帰国の途につく。親戚の家々を回った後、最終的に居を構えたのが郷里諫早であった。1930 年代半ば、戦時色の強まりつつあった中、兄弟姉妹のいない荒木にとっては母子二人での生活の始まりであった[18]。

日中戦争開戦を 7 歳で、太平洋戦争開戦を 11 歳で迎えた幼少期の荒木にとって、「戦争」は常に身近な存在としてあったが、なかでも 1943 年の三池海員養成所への入所は、「戦争」の存在を身をもって感ずる最初の契機となった。

1918 年、大牟田市三池で三井商船により設置された同普通海員養成所は、第一次大戦後の一時閉鎖を挟み 1937 年に再開、人手不足にあった民間徴用船の乗組員育成を担う機関として、甲板部・機関部・司厨部を備えていた。荒木は諫早の高等小学校を卒業後に同所へ入所、1944 年に司厨部を修了した[19]。

同年 2 月、一時帰宅を許されていた荒木の元に電報が届く。彼にとって第一の転機となる、輸送船への乗船指令である。南方への軍事輸送任務のため横浜港へ招集された荒木は、地域婦人会らの盛大な壮行の下、諫早駅を出発する。しかし、乗車後すぐ荒木は死の恐怖にさいなまれ、途中肥前山口駅で下車してしまう。後年「恥辱」と自ら述べる、戦争からの「脱走」であった。

輸送船爆沈のシーンが、幻のように頭をよぎります。片方では、軒下に立ったまま、寂しい笑顔で手をふる母の姿が二重写しで瞳をふさぎます。その二つがからまりあって、グルグル、グルグル、体の中を駆けずり回るのです。[…]

周囲の人を見ると、誰もが、わたしの動揺をジロジロ見つめているように思われました。車中には、腕章をはめた軍人の姿もありました。このまま横浜へ向かえば、もちろん問題はない。一か八か。ここから逃げ帰るというのは、それは脱走することなんだ。乗船するか脱走するか。東へ行くか西へ戻るか。撃沈されるか逮捕されるか。[…]

図 2　荒木正夫
出典：荒木多佳子氏提供

汽車がガタンと音をたてて停車すると同時に、いち早くわたしは、列車から飛び降りました。[…] 出札口を出たわたしは、意外にサバサバとした気持ちで歩き始めました。けれども、いざ横浜への切符を破り捨ててみると、逆転の決意と脱走の憂愁がごちゃまぜになって、何か、脱走の悲劇を自作自演している自分が哀れになりました[20]。

同日深夜、約 60km の道のりを徒歩で引き返し玄関先に立っていた荒木を、母は複雑な表情を浮かべつつも迎え入れた。その日は荒木自身贖罪意識を抱えたまま床につくが、乗船予定だった輸送船が米軍の潜水艦に撃沈され多くの同窓が亡くなったことを知るのは、さらに後年になってからのことであった。

「脱走」の数日後、荒木は職業紹介所から出頭命令を受ける。係官 2 名に

叱責されつつ荒木は、新たな勤務先として同市内の海軍病院への赴任を提案される。荒木にとって第二の、そして最も大きな転機となる、佐世保海軍病院諫早分院への配属であった。

後年まで交友を続けることになる池田貞夫ら同僚と同院烹炊所で勤務を開始した荒木は、配属から約 1 年半後の 1945 年 8 月 9 日、ここで長崎の原爆投下当日を迎える。閃光と轟音を感じるも、爆心から 20km 以上の距離がある諫早分院内で直接的な被害を受けることはなかった。彼が長崎の原爆被害を目の当たりにするのは、同日午後から続々と搬送されてきた、大量の負傷者の救護に携わる中でであった。

8 月 9 日当日、長崎市内の病院施設は爆風や熱線による火災でほとんどが機能不全となった。長崎医科大学の永井隆や浦上第一病院の秋月辰一郎など一部生存医師らによる救護活動が試みられたものの、手当の必要な被爆者の大半は、救護列車に乗せられ市外各地に搬送されていくこととなった。

大村市や佐世保市など、各地に大量の被爆負傷者が運び込まれる中、諫早は長崎からの距離的な近さもあり、約 4000 人という最大規模の搬送者を迎えた地域としてあった。駅から近距離で医療設備面も充実していた諫早分院には、計 600 人以上の被爆者が運び込まれることになる[21)]。

烹炊所勤務の荒木は直接的に看護業務に携わったわけではないものの、負傷者への炊き出し業務に奔走、連日負傷者が運び込まれ医師や看護婦の手が回らなくなると、応急手当の業務にも駆り出されることとなった。赤子に授乳しながら息絶えた母親や、ガラス片にまみれた女児など、凄惨な光景に囲まれる中、荒木はのちに何度も回想することとなる一組の親子に出会う。

母親と姉弟からなるこの 3 人の親子は、既に分院に搬送された時点で相当な重傷を負っていた。とくに母親は裂傷と火傷で衰弱を極めており、子らの呼びかけにも応じるのがやっとという状態にあった。それを見た荒木は、母親の看病の傍ら、姉弟の遊び相手ともなり、連日病院内で交友を続けた。母親も会話ができるほどまで回復傾向にあったが、搬送から 4 日後容態が悪化、

荒木らの見守る前で息を引き取った。姉弟との年の近さもあり、荒木が「おにいちゃん」と慕われ始めた矢先のことであった。

> お母さんには、すでに軍医さんと看護婦さん二人が付き添って、脈拍を調べたり、血圧を測ったり、注射を打ったり、応急手当てが施されていました。[…]
> 隆くんの顔に、虚ろな視線を当てたお母さんが、
> 「たかしちゃん、ごめん、ねえ。かあさん、こん……な、からだに、なって、しまって……」
> […] ろうそくの灯が消えていくように、お母さんの言葉はそこで切れたようでした。言葉の消えるのと目を閉じるのと、どちらが早かったか、閉じた目は、再び開きませんでした[22]。

荒木は姉弟二人を自宅に呼び寄せる。荒木の母も姉弟を受け入れ、4人での生活が始まった。だが8月15日の終戦以降、これら父母を亡くした子らは孤児院への収容を進められていく。状況を知りえない姉弟に、荒木は「お兄ちゃんも、きっと後から行くけん」[23]と説得した。

その約束を信じつつも、涙ぐみながら孤児院行きの収容車に乗せられた2人の姿は、荒木にとって「脱走」につぐ二度目の、戦中に記憶された「負い目」となった。

1945年9月、米軍を中心とする連合国軍先遣隊は長崎県内へ進駐、県内各施設の接収を進めるとともに、医療施設の閉鎖ないし統合を進めていった。同月末での閉院が決められた諫早分院は、収容患者を大村や嬉野の各海軍病院へ移送するとともに、荒木ら従業員へ解雇退職を言い渡した。

他の米軍施設で1年ほど調理員を務めた荒木は、1946年頃小倉への移住を母から提案される。「わたしの、諫早の悪夢から抜け出したい気持ちに、母の提案は、パッと火をつけた」[24]と後に語るように、乗船拒否から姉弟との

別れまでを経験した諫早の地を離れる思いで、1947 年荒木と母親は小倉での生活を始めた。親類縁者の少ない地域で家計を支えるためにも、荒木は同地書店の営業員として商品の外販に周った。老舗書店宝文館での勤務を経て、1957 年には教科書販売や児童書販売を専門に扱う有限会社あらき書店を開業、旧小倉市馬借町で独立を果たした[25)]。

この間、荒木は自らの戦争体験を大々的に語ることは少なかった。もちろん身内や一部新聞記者らに対し自らの体験を語ることはあった。『長崎原爆絵本シリーズ』など戦争関連の出版を手掛けていたことも先に見た通りである。しかし、これらはあくまで「長崎の原爆体験」を伝える取り組みではあっても、「荒木個人の体験」をそこに直結させて語るというものではなかった。そもそも荒木にとって自らの体験を語るということは、姉弟との別れや、当時すなわち戦後という時代まで生き続けられた理由でもある、自らの「脱走」を語らねばならないということを意味した。諫早を「抜け出し」小倉に辿り着いた荒木にとって、その閉口はなおさらのことであった。

しかし、その「抜け出し」た先の小倉が、実際には原爆投下候補地だったという事実を知る。宮崎勝弘による特集記事「原爆投下、小倉だったら……」である。この事実は、荒木にとって自らの戦争体験からの逃れなさを改めて実感させるとともに、その体験に向き合う自らの覚悟を問うものとなった。

> いま、小倉に住んでいるわたしが、諫早の空に思いを馳せるとき、宮崎さんの原稿が、わたしの胸を走るのです。宮崎さんによれば、長崎ではなくて、小倉が、原爆投下の目標だったとか。わたしは、この運命の皮肉を考えずには居られないのです。[…]この本を出版しなければと思った、わたしの動機は以上の経過です。この本は、わたしの心です[26)]。

同書の出版作業を経たのち、荒木は堰を切ったように自らの体験を手記・口伝の形で公言していく。1985 年には初の自伝的作品『サヨナラはお乳の

匂い――脱走から生まれたわたしの終戦』を自社出版、6年後には同書をさらに平易な語り口に改訂した『ごめんね、お母さん――長崎で原爆をみた少年の心の記録』をポプラ社から刊行する。諫早での体験についても1988年、当時の同僚や看護師・医師らの証言を自ら収集して周り、『あの日よ再び来ないで――1945.8.9もう一つのナガサキ』にまとめ上げた[27)]。

地元紙『西日本新聞』は、当時の荒木を以下のようなインタビュー記事で紹介している。

> 「戦争の恐ろしさを知らない世代に語り継がねばならない」と思い続けた。
> だが、その思いを語ろうとするとき、いつもためらいがあった。それは「脱走」という、人に知られたくない、自分の古傷に触れねばならなくなるからだ。それを隠しては、原爆体験は語れなかった。[…]
> 「自分の恥辱で沈黙してしまうより、被爆者の苦しみを伝えることの方が社会的意味は大きい。自分の恥ずかしさぐらい何だ、と思い直した」。その瞬間、長年、胸のうちにくすぶり続けてきたこだわりが吹っ切れた[28)]。

荒木は先述したように自らを「被爆経験者」と称していたが、『小倉原爆』や自らの体験記出版を前後する中で、次第に「被爆者」というより直接的な表現を自称していったことも注目に値する。一連の戦争関連出版について触れた1985年の文章で、荒木は以下のように述べている。

> この「長崎」の原爆がこうして多くの人々の胸に新たな感興を呼び起こすことができたということ、それが、たまらなく嬉しいのです。というのも、この私自身がその長崎被爆者の一人に他ならず、この出版が、その長崎原爆の弔い合戦のような気がしてならないからなのです[29)]。

『小倉原爆』は、前章で見たように被爆を免れた北九州地域における集合的・疑似的な「被爆体験」を想起させたのみならず、その出版を担った荒木のように、同地に住まう実際の被爆者たちの「被爆体験」をも、改めて想起させる契機となっていた。上記の記事が掲載されたのは『小倉原爆』出版後の 1986 年 8 月、荒木が宮崎の報道記事を目にしてからちょうど 4 年を経過した時期のことであった[30)]。

4. 余波と影響――『小倉原爆』と北九州の「被爆体験」

宮崎勝弘と荒木正夫、この 2 人の中心的な尽力により世に出た『小倉原爆』が、1983 年の出版当時北九州内外で大きな反響を呼んだことは先に見た通りであるが、同書はその後も、平和教育や自治体史など様々な場で引用・言及がなされる資料となっていく。

出版と同年 1983 年から刊行が開始された『北九州市史』は、87 年刊行の「近代・現代（行政社会篇）」で『小倉原爆』に言及、第 6 章「戦時体制と戦時下の市民生活」は、「原爆第二号機の目標となった小倉」と題する項内で同書を計 2 頁にわたり引用した[31)]。

戦後 50 年の節目にあたる 1995 年 8 月、北九州市が主催した企画展「北九州・戦時下の市民のくらし」でも、『小倉原爆』は展示後半のコラム「戦時下の北九州点描」内で、出版のきっかけとなった朝日新聞記事とともに掲載、重要な位置づけを与えられている[32)]。

市民からの資料寄贈も呼びかけられたこの企画展は、市当局で所蔵していた資料も含め後に北九州の公設平和資料館の建設計画にもつながっていくが、2022 年に開館したこの「北九州市平和のまちミュージアム」は、『小倉原爆』をシミュレーション結果の図表と合わせ紹介しており、同書が今日に至るまで北九州の「幻の被爆都市」というアイデンティティに与えた影響を見て取ることができる[33)]。

直接的な引用・参照に限らず、その後の記念事業や各種調査研究への影響も大きいものがあった。上記企画展と同年、投下目標とされた小倉陸軍造兵廠の元勤労学徒たちが半世紀ぶりに終結し、手記集『原爆 小倉→長崎』を刊行した。「長崎の原爆被災者と連帯意識をもとう」[34] という同書の問題意識は、まさに『小倉原爆』が 1980 年代に提起したものである。

市内の高校教師として平和学習に取り組んでいた工藤瀞也による独自調査『小倉と原爆』は、あらき書店がその出版を担っていることからも明らかなように、より直接的に、宮崎や荒木らの問題提起を引き継ぐ試みとして、今日にまで参照され続ける文献となっている[35]。

重要なのは、こうした『小倉原爆』後の北九州内外での反響が、前章でふれた荒木正夫自身の個人的変化とも、一部連動していたということである。宮崎の記事を契機に荒木が自らの「被爆体験」を直視し始めたことは先に見た通りであるが、この頃から、荒木は自らの被爆者手帳の申請にも前向きな姿勢を見せ始めた。前記手記集や記録集の取材のため再訪した諫早の地で、分院勤務時の同僚や仲間と再会を果たしたこともその要因の一つであった。

逆に言えば、それまでの間荒木は、自らを「被爆者」と認めていなかったということ、あるいは認めることができなかったということでもある。法制度的には既に 1957 年の原爆医療法成立時点において、救護活動等に携わった者はいわゆる 3 号被爆者として、爆心近くにおらずとも手帳の申請が可能であったにもかかわらずである。

1988 年に被爆者手帳を取得して以降も荒木は、2005 年に没するまで自らの体験を学校教育や各種メディアで語り続けた。戦争体験から「抜け出」すため移住した地であると同時に、その戦争体験を改めて想起させられる地ともなった北九州において、「脱走」者かつ「長崎被爆者の一人」の視点から発せられた証言であった。

八月九日は、長崎に原子爆弾が落とされた日です。

それは、小倉に落とされたはずの日でもあります。
長崎の体験は、小倉の体験でもあります。
「長崎原爆」は他人事ではありません。
今年も八月九日はやって来ます。
来年も、その次の年も……[36]。

『小倉原爆』末尾に添えられたこの言葉は、同書を世に問うた宮崎や荒木の心情を表していると同時に、その後同書の問題提起を受け継いでいく北九州地域の市民意識をも、象徴的に示しているものであるだろう。

5. おわりに

本稿では、1983 年の北九州で出版された『小倉原爆』とその出版経緯を辿ることで、戦後同地で見られた「被爆体験」の形成過程を明らかにしてきた。ここでいう「被爆体験」とは、一つには、第 2・4 章で見たような宮崎による取材記事やそれを受け止めた市内外の反響に象徴される、いわば疑似的・想像的なレベルでの「被爆体験」である。同時に、それは第 3 章で見たような、小倉に住みつつも長崎の救護体験をもった荒木が象徴する、より直接的・実態的なレベルでの「被爆体験」であった。

社会・個人双方が、相乗的に北九州地域の「被爆体験」を形づくったとも換言しうるこの『小倉原爆』の実践は、北九州という地域、また原爆という対象に限らず、敷衍するならば、どのような事例にも通用する一つの問いかけを、例示的に示しているように思われる。すなわち、いかなる社会問題・社会運動であれ、そもそも非当事者というものは存在しえないのではないかという問いかけである。

北九州は原爆投下を免れたという意味で、たしかにその「非体験性」は否定できないものとしてあった。同地で「被爆体験」の当事者性が獲得されて

いく過程に、森らによるシミュレーションなどある種の想像的かつフィクショナルな要素の介在が求められたことは本稿で確認してきた通りである。ただ見逃すべきでないのは、そうしたシミュレーションの算出過程では、気象台資料や地形図などの歴史的一次資料が重視されてもいたということである。『小倉原爆』自体、シミュレーションに関する説明はわずか数頁で、B29の目撃証言など、宮崎が取材した8月9日当日の北九州市民の証言が大半を占める内容となっている。

それは、「幻の被爆都市」という同地のアイデンティティ構築のプロセスが、「他者」「他地域」としての長崎に対する一足飛びの想像的「共感」としてあったのではなく、むしろ自分たちが住まう地域を基盤にし、その歴史を一つひとつ掘り起こす中で、長崎との通底部に行き当たるという、極めて実証的かつリアリスティックな過程であったことを示してもいる。

「SFにならないか、という心配もありました。そのためにも、昭和二十年八月九日当日の小倉を、出来るだけ忠実に再現するように努めました」[37]という同書あとがきは、その意味において重要である。同書出版後『朝日新聞』「今日の問題」欄で強調された以下の指摘は、より直截に、当事者／非当事者の境界への問題提起を発している。

> 「小倉に原爆」は、架空の話だ。しかし、投下寸前までいったのは、歴史に残る事実である。市民は、雲のわずかな切れ目に、地獄のボタンに指をかけた米軍機を見た。これほど、事実に近い架空話、はない。
>
> 小倉はどこよりも、ナガサキを実感できる位置にある[38]。

核時代における当事者性について思考していく際、想起されるのは、広島のジャーナリスト金井利博によって提起された「核の人質」論だろう。通常兵器と決定的に異なるその被害の強大さゆえに、核兵器は「当事国」や「当事者」といった区別・境界そのものを無意味化し、人類全体を核の「人質」

としている。1970 年に金井がこの問いかけを発してから半世紀以上が経過した。米ソによる核開発競争が一旦の終結を迎えた今日においても、世界中に拡散した核兵器の総数は約 1 万 2000 発、その性質も、半世紀前とは比較にならないほどの破壊力となっている。広島・長崎そして小倉が標的とされた第二次大戦時の質量と比べれば、なおさら今日の私たちが核の「人質」となっている状況、すなわち核時代の当事者であることが明らかだろう[39]。

人類を数百回殺戮可能とも言われるこの質量で、核兵器が私たちの生活を包囲している現在、戦争の「当事国」「当事者」とは一体何を意味するのか、あるいは「当事者／非当事者」という区別自体、そもそも設定可能なものなのか。『小倉原爆』とその背後にあった宮崎・荒木の思想と行動は、この古典的かつ極めて現実的課題を、改めて私たちに問いかけるものとしてある[40]。

注

1）それぞれ、『長崎新聞』2023 年 7 月 4 日、『中国新聞』2023 年 7 月 4 日。

2）福岡県の被爆者人口は、広島・長崎を除く 45 都道府県で戦後一貫して最多であったというわけではない。1965 年以降 10 年毎に厚生省（現厚生労働省）が実施してきた被爆者実態調査でも、最大の被爆者人口を擁してきた自治体は、長らく東京都と大阪府であった。なお 2023 年 3 月現在、福岡県下とくに北九州市内の被爆者人口は計 706 人で、各区の内訳は以下の通りである。門司区 89 人、小倉北区 153 人、小倉南区 121 人、戸畑区 62 人、若松区 60 人、八幡東 43 人、八幡西区 178 人（福岡県がん感染症疾病対策課調べ）。

3）水田九八二郎による古典的かつ悉皆的な整理『原爆児童文学を読む』（三一書房、1995 年）を筆頭に、近年の代表例として、宮川健郎「教育と原爆児童文学」（川口隆行編『〈原爆〉を読む文化事典』青弓社、2017 年、173-177 頁）、村上美奈子「原爆絵本研究における脱集計化と脱中心化の試み」（『立正大学社会福祉学部紀要』35 号、2021 年 3 月、105-125 頁）など。

4）石川捷治「九州における「戦争と平和」」（『比較文化年報』21 号、2012 年 3 月、75-91 頁）、坂本悠一「北九州における軍隊と戦争――「軍都小倉」の成立・衰退・再生」（林博史編『地域のなかの軍隊 6 大陸・南方膨張の拠点 九州』吉川弘文館、2015 年、8-43 頁）、小倉徳彦「街なか散歩（5）小倉（北九州市）「軍都」の戦争遺跡を訪ねる」（『西日本文化』507 号、2023 年 7 月、20-22 頁）など。

5）吉田守男「長崎原爆の照準点」(朝尾直弘教授退官記念会編『日本国家の史的特質――近世・近代』思文閣出版、1995 年)、秋吉美也子『横から見た原爆投下作戦』(元就出版社、2006 年)、また郷土史の取り組みとして、坂井初芳「「小倉原爆」回避を追う」(『ひろば北九州』314 号、2012 年 8 月、46-48 頁)、井田博「なぜ原爆搭載機は長崎に投下したか」(『ひろば北九州』1993 年 4 月、44-45 頁)、真仮通造「長崎原爆攻撃機 八幡上空を西進す」(『黒崎之里』10 号、1984 年 10 月、68-72 頁）など。その他米国側の記録としては、F・ニーベル /C・ベイリー（笹川正博ほか訳)『もはや高地なし』(光文社、1960 年)、C・スウィーニー『私はヒロシマ、ナガサキに原爆を投下した』(原書房、2000 年)、また工藤洋三らによる訳出の成果『米軍資料 原爆投下報告書』(東方出版、1993 年）及び『米軍資料 原爆投下の経緯』(東方出版、1996 年）など。

6）北九州地域における「被爆体験」に注目した他の重要な論稿としては、福岡県被団協の調査にも参画した石川捷治による「被爆者論小考――福岡県内における調査と証言を手掛りとして」(『法政研究』56 巻 3・4 号、1990 年 3 月、1-34 頁）や、地元出身の挽地 (畑中) 佳恵による「あの頃の自分たちのこと――小倉原爆、そして民話としての原爆体験」(『敍説Ⅱ』、7 号、2004 年 1 月、32-43 頁）などが挙げられる。とくに畑中の論稿は、『小倉原爆』や荒木正夫の存在にも注目しており、本稿の問題意識と通底する重要な論稿である。ただ、畑中の主たる関心は、非体験者（地）が体験や記憶を共有することの可能性と限界についての理論的考究におかれており、『小倉原爆』出版前後の北九州地域における社会史的検証は、本稿の課題として残されている。なおその他エッセイやルポルタージュ作品としては、林えいだいによる『女たちの風船爆弾』(亜紀書房、1985 年）が造兵廠でのふ号作戦と米国による候補地選定過程の関係性について指摘しているほか、近年では、北九州市内の医師である藤尾裕宣による独自調査『今ふたたび長崎の鐘――被爆の深層を探る』(幻冬舎、2019 年）や、小説作品として森成人『曇天の機影』(さんこう社、2021 年）などが注目に値する。

7）なお同日の東京本社版と大阪本社版の 1 面トップは、それぞれ「教科書問題 首相、早期解決を強調」と「宅地供給増へ調整区域開発」である。

8）桑島久男「あとがき」朝日新聞西部本社社会部編『小倉に原爆が落ちた日:シミュレーション（モデル計測)』あらき書店、1983 年、頁数なし。下線は引用者。なお同社内での当時の取り組みについては、宮崎勝弘による「もし「小倉」に落ちていたら」(『AERA』389 号、1995 年 8 月、24-25 頁）も参照。

9）「声」『朝日新聞』1982 年 8 月 11 日（西部本社版)、5 面。

10）荒木正夫「この本は、わたしの心」朝日新聞西部本社社会部編前掲書『小倉に原爆が落ちた日』、頁数なし。

11）「北九州では平和授業」(『朝日新聞』1983 年 8 月 9 日［西部本社版］夕刊 7 面)、「こわい原爆 子ら身近に「雲がなかったら」」(『朝日新聞』1983 年 8 月 10 日［西部本社

版］16 面）など。

12)「教育・反核の場に反響」『朝日新聞』1983 年 8 月 2 日（西部本社版）、夕刊 6 面。下線は引用者。

13) それぞれ、「地方出版」（『出版ニュース』1297 号、1983 年 9 月、13 頁）、「児童図書」（日本図書館協会編『選定図書総目録 1984 年版』日本図書館協会、1984 年、571 頁）。

14)「身代わり 犠牲者安らかに」『朝日新聞』1983 年 8 月 9 日（西部本社版）、夕刊 19 面。

15) 荒木前掲稿「この本は、わたしの心」、頁数なし。

16)「各時代への警鐘に」『朝日新聞』1982 年 8 月 5 日（西部本社版）、18 面。

17) 荒木前掲稿「この本は、わたしの心」、頁数なし。

18) 本章での荒木に関する記述は、基本的に荒木の自伝的著作であり本論内でも後述する以下の書籍を参照した。荒木正夫『サヨナラはお乳の匂い』（あらき書店、1985 年）、同『ごめんね、お母さん』（ポプラ社、1991 年）。これらは荒木が自身の半生を児童向けに書き下ろしたものであり、狭義の「自伝」や「回想録」とは異なるものの、基本的には事実に基づいた記述が原則とされている。その他詳細な確認が必要な場合には、各時代の新聞資料や、「荒木正夫」（『福岡県人物・人材情報リスト 1994』日外アソシエーツ、1994 年、43-44 頁）、「荒木正夫」（『現代日本人名録 90 上』日外アソシエーツ、1990 年、166 頁）を参照した。

19) 海員養成所の沿革については、日本経営史研究所編『創業百年史』（大阪商船三井船舶、1985 年）、三井船舶株式会社編『創業八十年史』（三井船舶、1958 年）を参照。

20) 荒木前掲書『サヨナラはお乳の匂い』、16-21 頁。

21) 諫早での救護活動については、諫早市役所編纂室編『諫早市制十年誌』（諫早市役所、1951 年）や諫早市福祉事務所福祉課編『諫早市原爆被爆者救護活動の記録』（諫早市、1983 年）など参照。その他県内全体の救護活動の記録については、『長崎原爆戦災誌』第 3 巻（「続・地域編」1985 年）・第 5 巻（「資料編」1983 年）や、『広島・長崎の原爆災害』（第 15 章・1979 年）、及び『長崎県警察史』下巻（第 4 編・1979 年）などに詳しい。

22) 荒木前掲書『サヨナラはお乳の匂い』、108-109 頁。

23) 荒木前掲書『サヨナラはお乳の匂い』、126 頁。

24) 荒木前掲書『サヨナラはお乳の匂い』、133 頁。

25) あらき書店開業に至る経過については、同社『会社沿革』（非売品）のほか、荒木が入社する前後の宝文館の状況として、「名門、小倉宝文館始末記」（田中治男『書店人国記』［第 3 巻・福岡編］東販商事、1984 年、163-167 頁）などを参照。なおあらき書店は 2021 年に登記記載が消失し現在は法人としては存在していない（『官報』号外 124 号、2021 年 6 月 3 日、57 頁）。

26) 荒木前掲稿「この本は、わたしの心」、頁数なし。

27)「我々の生涯を通じての最大の思い出を本にすることができました」と荒木自身語る

同書は（荒木正夫「「あの日よ、再び来ないで」の出版に際し、我が胸再び痛む」佐世保海軍病院諫早分院の会編『あの日よ再び来ないで』あらき書店、1988 年、頁数なし)、当時の看護婦や医師ら計 30 人の手記を収録、彼ら彼女らは九州各地のほか一部愛媛県などにも散っている状況にあった。諫早分院での救護活動を主導した軍医の勝正敏は、戦後長崎県内での医療活動に従事している（勝正敏『無医村開業四十年の歩み』近代文芸社、1984 年)。なお荒木の体験記は、2000 年代以降も児童書などで取り上げられるものとなっている。一例として､「まり子ちゃんの角ざとう」(『短編！ほんとうにあった感動物語 5 戦争･紛争を考える感動物語』学研、2009 年、99-118 頁）など。

28)「いま、訴える⑤児童向けに原爆の本」『西日本新聞』1986 年 8 月 15 日、11 面。

29) 荒木正夫「「戦争体験記」出版に思う」大櫛戊辰『わたしは、やっぱり中国のマーマ』あらき書店、1985 年、94 頁。

30) 本章で取り上げた諫早の救護活動に関する同時代の手記として、荒木ら以外の代表例としては以下が挙げられる。「惨禍のなかの救護活動」(『長崎の証言』第 8 集、1976 年所収)、「諫早における被爆者の救護作業」(『原爆前後』54 号、1983 年所収）など。近年の整理としては、ジャーナリストの高比良由紀による「諫早の中の戦争と原爆」(『証言 ヒロシマ・ナガサキの声』第 33 集、2019 年所収）が重要である。

31) 北九州市史編さん委員会編『北九州市史――近代・現代（行政・社会篇)』北九州市、1987 年、699-704 頁。

32) 北九州市立歴史博物館編『戦後 50 周年記念・北九州平和資料展図録 北九州・戦時下の市民のくらし』北九州市立歴史博物館、1995 年、74-75 頁。

33) 1990 年代以降に自治体が記録収集した手記集においても、原爆投下を免れた当時の体験記は収録されていった。「(4) 空襲・原爆」(福岡県総務部県政情報課編『わたしの戦争体験』1996 年所収)、「市民の空襲体験」(北九州市総務局総務課編『後世に語り継ぐ北九州市民の戦争体験』2016 年所収）など参照。

34)「編集後記」勤労学徒の会編『原爆 小倉→長崎』北九州勤労学徒・工場 OB・市民の会、1995 年、287 頁。

35) 工藤は同書末尾で荒木への謝辞を記している。「本書刊行の場を与えて下さった､小倉の地で「戦争を知らない子どもたちへ贈る感動の書（長崎原爆シリーズ二十冊）などを手掛けておられる、㈲あらき書店の荒木正夫氏に厚くお礼申し上げる」」(工藤瀞也『小倉と原爆』あらき書店、1997 年、288 頁)。工藤の取り組みについては、同「「軍都小倉の歴史」を改めて ” 問い直す ” 試み」(『北九州学』その 2、2010 年 3 月所収）も参照。

36) 朝日新聞西部本社社会部編前掲書『小倉に原爆が落ちた日』、29 頁。

37) 桑島前掲稿「あとがき」『小倉に原爆が落ちた日』、頁数なし。

38)「今日の問題 小倉と長崎」『朝日新聞』1983 年 8 月 5 日（西部本社版)、夕刊 1 面。

39）なお金井の主意は、核時代の脅威を指摘することそれ自体に置かれていたというよりも、むしろその認識をふまえ、社会運動のあり方総体を批判的に再編成していくことにあった。すなわち、「対国家」や「対体制」としての運動とは異なる、一切の境界線をこえた「まだら」状の運動体に関する問題提起である。「世界の人民は、それらの核権力の「敵方」と「味方」と「中立」とを問わず、すべて、世界に君臨する核権力の「人質」となっている。［…］核の「人質」たる自国の人民を「一枚岩」の「敵性」から敵、味方、中立と入り乱れた「まだら」の人口に変革すること。これが世界中に起こったら、核戦争の攻撃目標は世界中からなくなる」（金井利博『核権力』三省堂、1970 年、9-10 頁）。

40）本稿では『小倉原爆』が刊行された 1980 年代を主な対象としたが、北九州の「被爆体験」形成に関わる最初期の端緒としては、厳密には 1946 年に発せられた濱田良祐小倉市長の檄文が重要な事例としてある。長崎の原爆が小倉に投下されるはずのものであったことをふまえ、復興期の市民意識を鼓舞したこの檄文は、平和のまちミュージアム開館に合わせ北九州市立文書館から移管、『小倉原爆』のシミュレーションと並び展示されている。同市の「被爆体験」が形成される過程で、『小倉原爆』以前あるいは以後に、どのような取り組みが見られていたのか、この点については、本稿で扱いえなかった新潟・京都・横浜など他の投下候補地における事例分析と合わせ、今後の研究課題としていきたい。

［附記］本研究は、公益財団法人松下幸之助記念志財団による研究助成（2022 年度：22-G14）を受け実施されたものである。

［謝辞］本研究の調査過程では、資料収集や聞き取り調査に際し以下の方々にご協力を賜りました。荒木多佳子氏、宮崎勝弘氏、福岡県被団協、北九州市原爆被害者の会、諫早市美術・歴史館。記して深くお礼申し上げます。